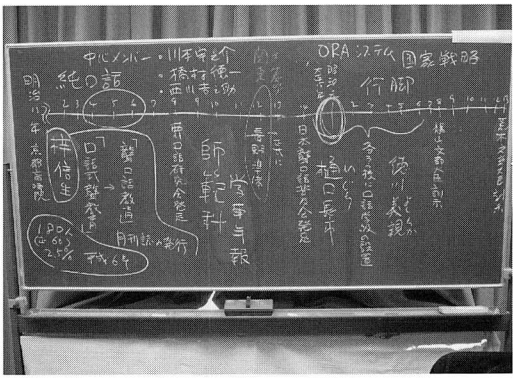
分科会「ろう教育の歴史」

司会：桜井強／助言者：中根伸一／記録：中根清隆

参加者、口話教育の思い出
サシスセソ、ラリルレロ、ハヒフヘホ発音の苦手が多かった。
ストローで吹くのが下手。

手話の歴史→口話の歴史へと変わった背景
1．ミラノ宣言（聴覚障害教育国際会議1880年・明治13年）
　口話法の優位性を宣言
2．西川はま子に口話法教育で成果　唖でも話せる。
3．社会参加（会社・仕事に就くため）
4．その他
　関東大震災→発音のため朝鮮人に間違えられて誤殺。
　大正デモクラシー→外国から情報



黒板に書かれた口話教育史

背景の基盤
日本の社会　偏見、差別→仏教　前世思想
ヨーロッパ　キリスト教　障害の子は神の子
日本の法律におし・つんぼ（準禁治産者）

大正14年～昭和23年　聾学校に口話教育広まる。
生野→大正15年　小樽→昭和２年口話教室設置　宮城→昭和２年　盛岡→早い時期
神戸→昭和６年
国→昭和8年　鳩山文部大臣訓示

明治11年　京都→日本最初の聾学校

口話式聾教育→聾口話教育
大正８年　西川口話研究会発足
大正12年　長野聾学校準備　大正13年正式に口話教育
大正14年　日本聾口話普及会発足
大正15年・昭和元年　聾学校に口話学級の設置
昭和初期　聾唖者教員排除進む
昭和８年　鳩山文部大臣訓示
昭和13年　荒木文部大臣訓示（口話法に疑問）
口話三羽ガラス「川本宇之介　橋村徳一　西川吉之助」
長野聾学校創立100周年記念誌に「リズム的訓練　感覚の訓練　読話の訓練　口形のイメージ音器の訓練　発語訓練」文部省の聾児国語教授法（大正15年発行）が載っていた。

手話学級の生徒は口話学級の生徒と交流させなかった。時間交代制で教室に入れ替わり。
小樽では教室や校地に壁を作った。
手話学級から口話学級拡大、そのまま移動して手話学級の生徒が卒業していなくなれば、手話の先生・ろう教員はクビ、退職を余儀なくされた。居残っても給料の安い用務員に配属されてしまう。

口話教育熱心の教員→生徒のためでなく、出世のため。
徳川義親→初めは日本聾口話普及会にかつがれて国へ窓口に努めたが、当時の聾教育に厭気がさし、成人ろう者福祉に転身。
川本口話賞（３～４年前に消滅）
大阪市立聾学校→手話・口話両方　大阪方式　ORAシステム
医者の作った聾学校→生野聾学校

「聾口話教育」巻頭言ペンネーム「梓　信生」の正体は東京聾唖学校　樋口長市氏？
昭和初期の生徒は今80、90代
昭和４年から毎年皇室から私立聾学校へ御下賜金
仮説　外国では口話は金かかる。１対１　アフリカでは手話、金かからない。

昭和10年代　名古屋で口話教員養成、全国から口話法教授を学ぶ教員が集まる。俗に「名古屋詣」という。
戦後、附属聾学校に聾教員養成科（特設教員養成部）

明治時代から金持ちの子が聾学校に就学。私立聾学校が多い。
戦前の聾学校生徒の就学率15%～30%（地方15%、都会30%就学）
戦後昭和23年　盲聾にやっと義務制施行。その頃は就学率80%　入学年齢がバラバラ。
小樽盲唖学校では明治43年頃中流家庭が多い→ニシン景気、北海道開拓で仕事に恵まれる。
戦前の聾教員　全体の2.5%で40名に１名　聾教員約180名そのうち正式教諭60名　職業科助手が多い。

数の手話は京都、東京、大阪それぞれ違う。
大阪→商売の地だけにあって、手話による数の数え方がきわめてわかりやすい。例６＋７＝13
昭和４～６年編み出されたが、後になって昭和62年ろう教育研究会でろう重複障害児のための数の数え方があり、偶然か？
難聴学級は全国でいつからあったか？

戦前、北海道の聾学校５校　聾教師12名　正式４名師範科
幻の聾学校→豊原盲唖学校（樺太）
助言者（北海道）：知っている限りの豊原盲唖学校出身者は７名しかない。
当時は盲一人もいなかった。昭和19年廃校→軍指令
外国の日本人聾学校　満州に２校　韓国に２校　台湾に２校あった。
併合により日本の手話が進出して定着したか、疑問。逆に中国、韓国から手話が入ったという意

見がある。
仏教、技術、漢字伝播と同様に手話も向こうから入ってきたのでは？

■その他
万歳拍手のルーツは、昭和28年イタリアで世界聾会議から出た。振るハンカチから万歳拍手になった。
京都大学の亀井氏　７月下旬２ヶ月間ギャローデッド大学に滞在。
アフリカに聾関係資料あまりない。あってもボロボロ。
しかし、ギャローデッド大学２つの図書館にアフリカ関係が豊富。
保存状態が良く、古文書閲覧に申請が要る。200～300年前の聾関係古文書あり。日本の戦前資料もあった。
日本の公文書で学校日誌等は20年過ぎれば処分。学事年報は永久保存だが、子細に欠ける。
故中西、故貞広氏の蔵書など資料は京都手話研修センターへ保存。
全日ろう連資料も京都手話研修センターへ
世界ろう連盟長アンダーソン氏は生前にギャローデッド大学
世界ろう歴史会議→国際手話だがアメリカ手話強まる。
フランス→昔手話だったが口話傾向。口話のドイツはミラノ会議からの影響。

■参加者の感想
●昔の聾学校に何故手話教育から口話教育へ変わってきたのか、その歴史背景を知って、大変勉強になった。
●単に口話教育は良くないと一概に言えない。当時の聾者の就職など社会参加に必要だとわかった。
●今は手話教育へと変わりつつあるが、また口話教育に変わるかも知れない。歴史は繰り返す。
●手話か口話どちらが良いのではなく両方を持って、社会参加と共存に必要。
●手話と口話の長所を取り入れ、さらに日本語に力を入れていくことが大切。
■留意すべきこと
戦前のろう歴史は聾学校関係が圧倒的に多いが、聾者社会全体の歴史ではない。
就学率15～30％しかなく金持ちの子が多い。卒業後の長い人生はどうしているのか。
残り85～70％の未就学児や成人の生活、仕事の様子はわかっているかどうか。
戦前のろう歴史に聾学校ばかり見つめて、全体を捉えるのは誤った歴史観を持つことになる。
こうした史料や記録もなく、陽の当たらない大部分の歴史を忘れないでほしい。

■参考資料
「聾教育百年のあゆみ」昭和54年発行　財団法人聴覚障害者教育福祉協会
「偉大なる先達を慕いて」平成15年11月発行　市橋詮司（愛知県立岡崎聾学校長）編著